

日本地理言語学会第 5 回大会要旨集

**Abstracts of the Fifth Annual Meeting of
the Geolinguistic Society of Japan**

2023 年 6 月 10 日

10th June, 2023

南山大学, ハイブリッド

Hybrid, Nanzan University

日本地理言語学会第五回大会プログラム

日時：2023年6月10日（土）13:00～17:45（日本時間）

開催方法：ハイブリッド（会場での対面型、Zoomを利用したオンライン型の併用）

会場：南山大学H11教室（H棟1階） 466-8673 名古屋市昭和区山里町18

<https://www.nanzan-u.ac.jp/Information/access.html>

参加費：会場・オンライン参加ともに一般 1000 円、学生無料

○本会は会員制度をとっておりませんので、どなたでも参加できます。

○発表者・司会者と聴講を希望される方は、以下の要領で事前申し込みをお願いします。

(1) 以下の URL で参加申し込みと参加費のお支払いをお願いします。

<https://gsjannualmeeting2023.peatix.com/>

(2) 6月7日（水）午前に、要旨集とオンライン参加の案内をメールで送付します。

※6月7日午後以降に申し込みをされた方には、6月10日（土）午前にご案内します。

○対面会場では、紙媒体のプログラム・要旨集の配布はいたしません。ご自身で印字するか、ラップトップ・タブレット等をお持ちください。

○研究発表スケジュール：6月10日（土） 以下、日本時間

1300-1400 司会：福嶋秩子（新潟県立大学）

1. 招待講演1：歴史地理言語学の構想

遠藤光暁（青山学院大学）

1415-1515 司会：白井聡子（東京大学）

2. 雲南チベット語における「昨日」の語形と分布

鈴木博之（京都大学）

3. [Online] Various types of tone system evolution in Southern Min dialects and their geographical distribution in Quanzhou, Zhangzhou, Xiamen and Kinmen

Cai-yang CHEN (independent researcher)

1530-1630 司会：清水政明（大阪大学）

4. [Online] Linguistic maps of kinship terms in Vietnamese

Tran Thi Hong Hanh (Faculty of Linguistics, USSH Hanoi)

5. [Online] ロマンシュ語圏における否定辞の通時的分析- AISとAISrの比較から -

清宮貴雅（東京外国語大学大学院博士後期課程）

1645-1745 司会：岩田礼

6. [Online] 招待講演2：方言学・地理言語学と有縁性

Philippe Del Giudice (Université Côte d'Azur, CNRS, BCL, France)

南山大学キャンパスマップ



【対面会場での留意点】

- 懇親会・茶菓の提供はありません。飲み物等は、事前にご準備いただくか、キャンパス内の自動販売機・コンビニ（コパン 2 階、9:00-17:00）をご利用ください。
- 発熱（37.5 度以上）等の症状がある方は、対面での参加をご遠慮ください。
- 会場では、密集（2m が目安）しないようご協力をお願いします。
- マスク着用については、個人の判断に委ねますが、十分な距離（およそ 2m）が確保できず発声する場面においては、マスク着用を推奨します。

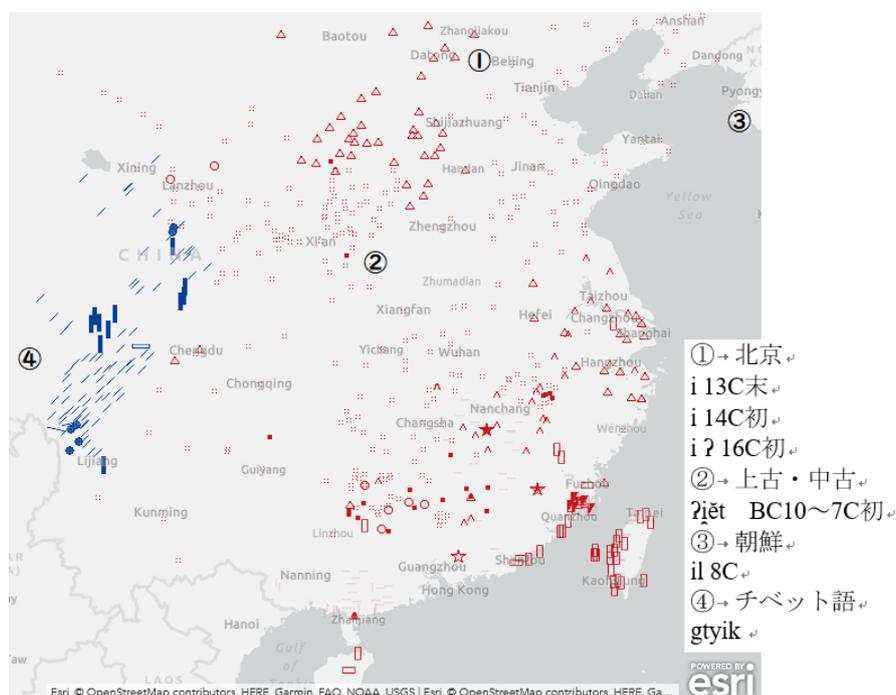
歴史地理言語学の構想

遠藤 光暁（青山学院大学）

「歴史地理言語学」というのは歴史言語学と地理言語学を結びつけた新造語である。通常の言語地図に古文獻から知られる語形を当該地点ないし地域に時代を付して三次元的に表示し、ある言語ないしある語族のある言語特徴に関してその形成過程を時空間中に定位して跡付けることを目指したものとなる。

この発表では遠藤が代表者である 2023-25 年度科研費基盤 (B)「移住と言語接触を視野に入れた漢語全時代形成史の歴史地理言語学的研究」で具体的に実現しようとしている構想を紹介する。この科研では3年間で『漢蔵語歴史語言地図集』第一巻を編むことを目標とし、音韻項目を主としつつも、語彙・文法項目も可能な範囲で扱う。その例として数詞「一」のサンプルを掲げる。これは研究分担者・協力者の鈴木史己・鈴木博之氏の作図したものの上に遠藤が文献に現れる語形と年代を追記したものである。まだ出発点なので地点数は少ないが、完成時には最多項目で2000地点、50時点以上の密度となるよう期している。その一方で、50~100地点程度の粗い密度の地図で多くの言語特徴を扱えるようにする可能性も探る。ただし、空間に加えて時間を簡単に扱える作図法はまだ確立しておらず、これまでの実践例も概観する。

また、近年遺伝学・考古学により先史時代からの人類集団の系譜・移住・混血の様相をかなりの地点/時点密度で推定できるようになってきている。ほか、歴史文献から知られる移住史や行政区画の変遷に関する先行研究も組み込んで、言語外的要因や言語接触の要因についても積極的に扱う予定であり、その一端についても言及したい。



雲南チベット語における「昨日」の語形と分布

鈴木博之（京都大学）

雲南チベット語とは中国雲南省内に分布するチベット系諸言語を指し、すべてがカムチベット語に分類される。チベット系諸言語における「昨日」は、チベット文語形式の *kha rtsang* と対応する事例が多数派を占める。対象とする地点においても同様の傾向が見られるが、次の点で大まかに分類でき、その分布は図1のようである。

A : *kha rtsang* 類 (A1) 2音節形式 ; (A2) 3音節形式

B : 非 *kha rtsang* 類

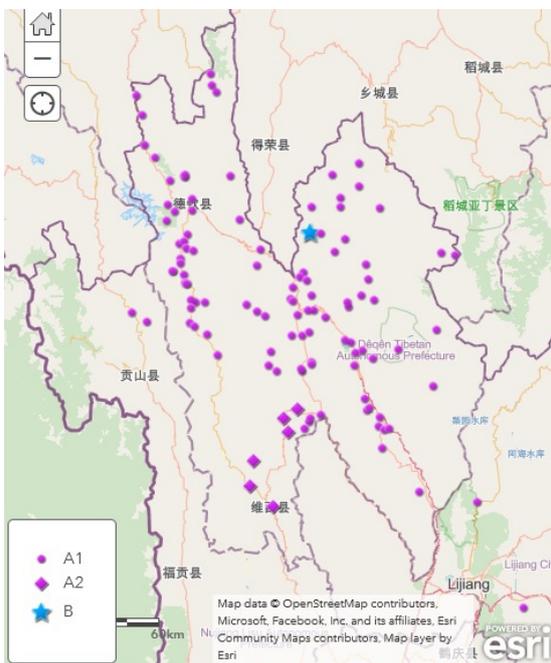


図1 : 「昨日」の語形 (大分類)

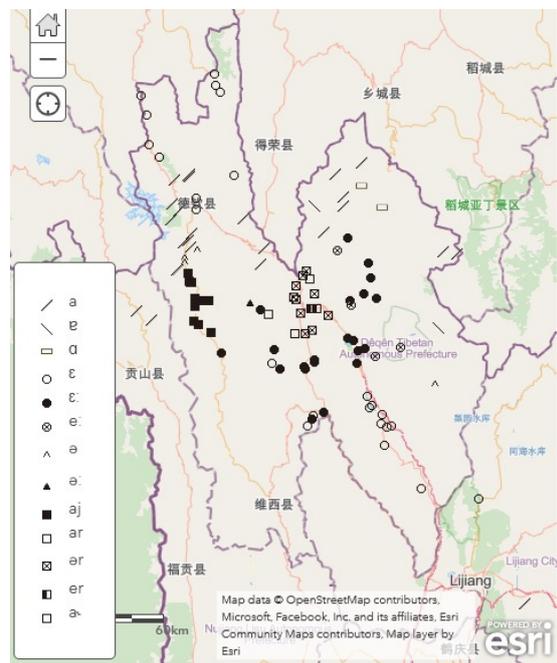


図2 : A1の母音+末子音の形式

図1に基づく、A1が多数派、A2が中央南部にかたまって分布、Bは中央北部に1地点のみとなる。結果、ほとんどの地点で文語形式との対応関係があると認められる。次に、A1についてその第1音節の分節音の形式に基づきさらに詳細に分類を見る。母音+末子音の形式に注目して分類を反映させた地図を図2に示す。図2における正方形が中央およびその西側にかたまって現れ、有意な分布を見せる。これらはチベット文語形式 (*kha*) に見られない末子音が音的に現れているものである。これが音変化を通して長母音 (図2における黒塗り形式) となると理解でき、それらも地図の中央部に連続して分布していることが分かる。それを取り囲むように短母音のみの形式が現れることから、中央部に集中して見られる形式をより新しい形式として考え、それが拡散していくモデルを考えることができる。中央部には地域の政治経済の中心地 (建塘) があるため、ABA分布を示す例として解釈を試みる。

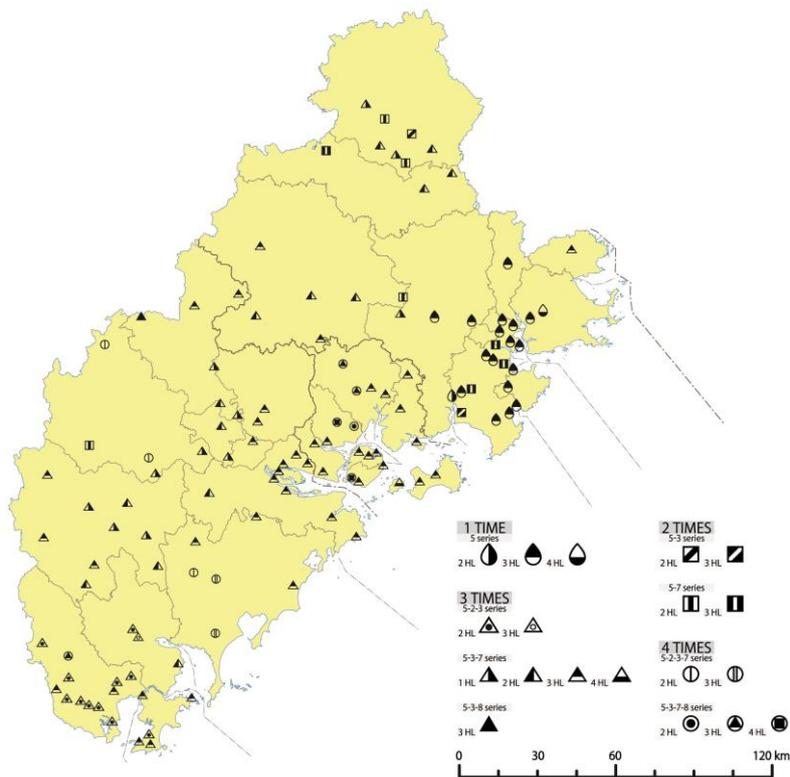
Various types of tone system evolution in Southern Min dialects and their geographical distribution in Quanzhou, Zhangzhou, Xiamen and Kinmen

Cai-yang CHEN (independent researcher)

This paper modifies the tone value system of common ancestral dialect of the main coastal Southern Min dialects (Hirayama, 2016) and categorizes the tone systems of 125 Southern Min dialect points in Quanzhou, Zhangzhou, Xiamen and Kinmen (Ang, 2023) based on their types of reconstructed diachronic evolution from the said modified tone value system according to the circular current theory on the phonetic values of tones (Hirayama, 2005).

The tone value system of each dialect point is categorized based on how many times the values of its tones have become a high falling tone from a high level tone diachronically (“time(s)”) and how many tones are currently high level (Hirayama, 2005). The former defines the dialect point’s “series” (1 = yinping; 2 = yangping; 3 = yinshang; 4 = yangshang; 5 = yinqu; 6 = yangqu; 7 = yinru; 8 = yangru), while the latter determines the number preceding “HL”.

This paper then maps these types of tone system evolution to observe their geographical distribution. It shows that the tone values of the dialects in Zhangzhou, Xiamen and Kinmen have generally gone further around the circular current than those in Quanzhou, indicating that the tone value systems of the dialects in Quanzhou are rather conservative.



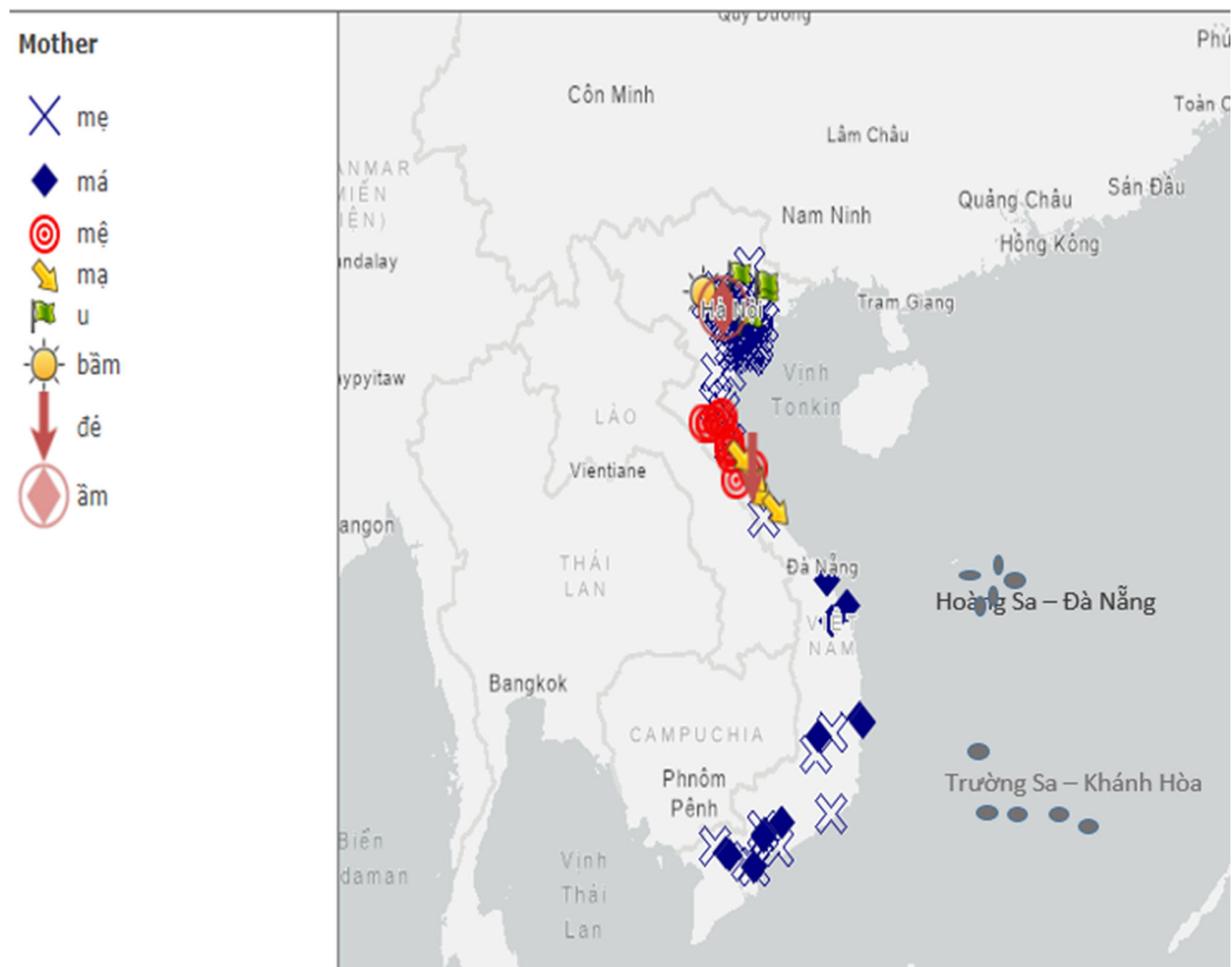
(The map is based on Chk2011, 2020; Onishi, 2003)

Linguistic maps of kinship terms in Vietnamese

Tran Thi Hong Hanh

Faculty of Linguistics, USSH Hanoi

There appears to be widespread agreement that kinship terms are considered as specific vocabulary in Vietnamese because kinship terms are used not only to address kinship relationships but also to address widely in social interaction among non-kin. This paper investigates kinship terms in Vietnamese dialects. After investigating and establishing a list of kinship words in Vietnamese dialects, the paper will show the distribution of kinship terms in Vietnamese dialects on maps drawn by ArcGIS. The history and origin of these kinship variants can be reconstructed by interpreting their distribution. These interpretations will provide further support for the historical approach to the study of kinship terms in Vietnamese dialects, which aims to enhance our understanding of language contact in the past.



Philippe Del Giudice (Université Côte d'Azur, CNRS, BCL, France)

方言学に端を発する地理言語学では地図上に豊富なデータが表示される。そして視覚的に訴えるその地図を通し言葉の分布や伝播、または変化などをより効率的に分析できる。ただし、地図作成と地図分析の両段階では研究者が使う理論の枠組みにより結果が大きく異なり得る。解釈地図の場合では特にそうである。従って、データを多角的観点から検討したり表したりするのに、理論を発展させる必要がある。

本発表では何枚かの地図にコメントしながらヨーロッパ方言学、地理言語学を一新した「モチベーション（有縁性）」の原則と基本的概念を紹介する。

例えば、通常の方法だけに据える研究では日本言語地図（LAJ）に掲載される「カマキリ」の地図とロマンス言語語地図（ALiR）の「カマキリ」に関するデータを比べた時、「日本語とロマンス諸語の語形は完全に違う」以外のコメントは難しい。それに反し、名称の創造または変化の際に重要である言語共同体の発想・解釈・世界観を考慮しつつ、動機、デズィニャン、有縁化という概念を用いることで、両領域における語形を新しくグループ化し、LAJとALiRのデータの、文化による差異だけでなくそれを超える共通点が多く見つかり、語形だけに基づく地図の代わりに共通性を表すモチベーションの地図の作成ができる（3つの共通動機を提示した以下の簡易比較地図案（仮）を参照）。またその際、動機の共通点を活かし、学者がどうやって既知の命名パターンに誘導され新しい語源探究の道を開くかというテーマにも触れる。

